

水村美苗「本格小説」上巻

どんな価値が「本格小説」という表題によって表されているのだろうか。文学の本質を体现した小説、というように理解して良いだろうか。

小説の本質は、架空の人生を借りながら表される、「私の世界」による「私たちの世界」の恐るべき席捲にあるのではないか、と私には思われる。「白鯨」に於いては、モービー・ディックによるエイハブ船長の人生全体の驚くべき支配がそれに当たり、「ロリータ」にあっては、「ロリータ」によるハンバート・ハンバートの人生の没落がそれに当たる。小説は、現実には影のように世界の背後に隠れ潜まねばならないはずの「私の世界」を、それまでは確かに他者と共有され、揺るぎない己の支配者であったはずの世界の、唐突な、そして孤独な専制君主として、再君臨させるのである。そうすることで私たちの人生が、これまでの間もいかに「私の世界」によって支配されてきたかという事実を明らかにする。

では、水村美苗さんの「本格小説」に於いて、モービー・ディックやロリータに該当する強いイメージ、「私の世界」の象徴的存在は何か？　ということになる。それが東太郎という人物なのだろうか。上巻にあっては、未だこの人物の魅惑の本質が何であるのか、ということが私には分からないけれども。

わたし達の道程は遠い。文学に於ける本質的な遅延が、この作品の上にも感じられるように思う。作品が一つの人生の時間に触れようとしているからだ、と考えて良いのかもしれない。「私たちの世界」という、私たち皆が共有する世界をまず丹念に辿ることからしか、小説の本来の目的は達成されることがない。そうしていつもようやく、私たちはそれまで隠されていた「私の世界」、見えていなかった至上の世界に辿りつくことができるのである。

水村美苗「本格小説」下巻

p 451「太郎ちゃんは一瞬ためらってから続けました。／ — 千歳船橋の庭で最初に見かけたときからずっと殺したいと思っていた。／ — そう……。／ よう子ちゃんはやはり憎きませんでした。再び眼を天井に戻して小さく喘ぎ続けているだけでした。それからもしばらく小さく喘ぎ続けていましたが、ややあって、太郎ちゃんに応えるというよりも、自分の胸の中を吐き出すように言いました。／ — あたしはずっと怖かった。小さいころからずっと怖かった。太郎ちゃんと二人でいると世の中がどんどんと遠くなるような、あたしただけがどんどんとみんなから離れて行ってしまうような、そんな気がして、怖かった。／ 太郎ちゃんは太郎ちゃんて自分の言いたいことを言いつのります。／ — ずっと殺したいと思っていた。／ — なにしる怖かったの。寂しかったの。／ 殺せばよかった。／ ...／ よう子ちゃんがふいに小さく叫びました。／ — ああ、なんて幸せだったんだろう。／ 太郎ちゃんの腕に必死で嚙りつくと、少し上体を起こし、太郎ちゃんの顔を下から覗きこみます。／ — あたしが死んでも、殺したいって思い続けてちょうだい。／ — ぼくが死んだって、殺したい。／ 太郎ちゃんはまた深々とベッドの上に覆い被さりました。／ — ああ、なんて幸せなんだろう。」

重度の肺炎を患い、遂に死を覚悟するに至ったベッドの上で、「よう子ちゃん」が全身覆われている幸福感、苦しい呼吸に襲われながらも、「よう子ちゃん」の世界を隈無く覆い尽くすかのように溢れでる幸福感こそ、私たちがそれぞれの人生の上で、いつも追い求めてきたものである。そしてそれは「私たちの世界」から遠ざかることを受け入れ、その為に体の内奥に巣食った孤独を一身に負う覚悟を引き受けることなしには、ついには手に入れることのできなかつたはずの幸福感である。

このような希有な幸福の場面が語るのは、実は普遍的な意味での幸福の所在である。もっと言えば普遍的な、人生の意味の所在である。逆説的ではあるが、この作品が、あるいは文学そのものが特異な表現であるわけではない。私たちの人生のあり方そのものが、あるいは幸福の体験というものそのものが、もともと逆説的な本質を持っているのである。そして文学は、この人生の逆説へと静かに浸潤する理解である。文学とはあり得べからざる真実への寄り添いなのだ。そのことをこの作品は教えてくれる。

「よう子ちゃん」は死の床で、無条件な幸福に浸ることができた。死を前にすることで、彼女は「私たちの世界」から離脱したからである。「太郎ちゃん」が彼女をそこまで誘ったのだ。彼女は「私の世界」に没入する。これに呼応するようにして「太郎ちゃん」も「私の世界」に没入する。彼にとっては、「よう子ちゃん」の死を作り出すことによって、彼女を世の中から切り離し、「私の世界」に引き摺り込むことだけが、唯一の幸福への道筋だったからだ。こうして二人の幸福な瞬間は完成する。この瞬間は完全だ。しかし、実は彼らの幸福な時間は、既に「よう子ちゃん」の夫「雅之ちゃん」の協力と、「太郎ちゃん」の、不幸に耐える力によって、約10年の間続いていたのだ。二人の世界を「雅之ちゃん」の妻に対するこの世ならぬ愛情が、現実の世界に、世の中に、繋ぎ止めていたのである。

「春絵さん」は、この奇妙な関係を許さなかった。彼女の仕打ちは彼女の「非」ではなく、「私たちの世界」における思考の当然の帰結を体現している。三人の中で唯一世の中と深く結ばれていた「雅之ちゃん」に意見することこそ、間違いなく彼女の最良の判断であった。

「本格小説」は、著者が直感したように、文学の本質を体現する希有な小説だ。「白鯨」や「ロリータ」に匹敵する靈感に満ちた小説と言って良い。そうして不思議なことに作品が現実取材している点は、文学の本質が人生の本質に根ざすということをも同時に証明するのである。

この作品には、語り手の問題も存在している。「土屋富美子」は「太郎ちゃん」と一時期肉体関係を持った。この事実は象徴的だ。「白鯨」の語り手の青年のように「エイハヴ船長」の船に自ら同船しなければ、「モーヴィ・ディック」と「エイハヴ船長」との物語は語ることはできない。彼女が「太郎ちゃん」と「よう子ちゃん」の物語を語らなければならなかったのは、彼女自身が「太郎ちゃん」に深く関わったからである。その意味は彼女の人生そのものが「太郎ちゃん」に奪われていたということだ。こののめり込みがなければ二人の物語は存在しなかった。すなわち、「太郎ちゃん」に更に人生を奪われたい、もっと言うならば一層危険な目に遭いたい、殺されたい、そう欲する気持ちがあれば、物語は生まれなかった。

そうしてこのことは、小説の書き手、水村美苗さんについても言えるのである。書くことは、自分の人生を世の中から切り離し、この世の中で生きないという決意を背負うことだ。そうして書くという孤独な、しかし唯一の幸福を介して、人生の逆説的な顕現に立ち会うこと、小説とはそのような営みなのである。